

夫婦のワーク・ライフ・バランスと家族 ーライフステージごとの変化ー

○ 尾形和男 (愛知教育大学)
福田佳織 (東洋学園大学)

坂西友秀 (埼玉大学)
森下葉子 (文京学院大学)

【問題と目的】 妊婦・幼児・児童・中学生・高校生
の各ライフステージにおいて、夫婦のワーク・
ライフ・バランスが夫婦関係・家族成員のスト
レス・家族機能形成に及ぼす影響について分析
を加える。

【方法】 調査対象：愛知と関東(埼玉・千葉・東
京)の 2,074 世帯(妊婦 258 世帯、幼児 457 世帯、
児童 418 世帯、中学生 625 世帯、高校生 315 世帯)。

調査用紙：母親用 1：①父親・母親の職業 ②家
族構成 ③子どもの年齢と性別、を問う質問紙
2：妻のワーク・ライフ・バランスを問う質問紙[尾
形 (2009)。夫も同じ。] 3：夫婦関係を問う質問紙
[諸井 (1996)。夫も同じ。] 4：妻のストレスを問
う質問紙[清水・今栄 (1981)。夫、子どもも同じ。]

父親用 質問紙 1～3 は母親と同様の質問紙で父親
が回答。4：家族機能についての質問紙[渡辺 (1989)]

子ども用 1：子どものストレスを問う質問紙。母
親用、父親用、子ども用を別々に冊子にしてまと
めて同封し協力関係機関に配布し、記入後まとめ
て回収した。

【結果と考察】 共働き家庭 (1,294 世帯) を対象
として、夫と妻別に因子分析 (主因子法、*promax*
回転) により構造化を図った。その結果、夫は①
妻や家族との交流②仕事関与③近隣への関与④余
暇時間の活用、妻は①仕事関与②夫や家族と交流
③余暇時間の活用④近隣への関与、の 4 因子抽出
された (α 係数は .700～.792)。夫と妻の 4 因子得
点を基にして非階層的クラスタ分析を実施した。
最終クラスタ中心に基づき 4 クラスタを抽出した
(Figure1)。それぞれ、Ⅰ：夫婦全領域活動型、Ⅱ：
夫婦家庭・仕事・余暇型、Ⅲ：夫婦不活発型、Ⅳ：
夫家庭・妻家庭と仕事型とした。また、夫婦関係、
ストレスについても同様に因子分析を行い、「相互
理解」「相手への要望」と「とらわれ感」「不安感」
の因子を抽出した。また家族機能は「結合性」「表

現性」「権威的」「民主的」の 4 機能を用いた。ラ
イフステージごとに、4 クラスタを独立変数、夫
婦関係、家族成員のストレス、家族機能を従属変
数とする一元配置分散分析を行った。その結果、
夫婦関係ではライフステージを通して「夫婦不活

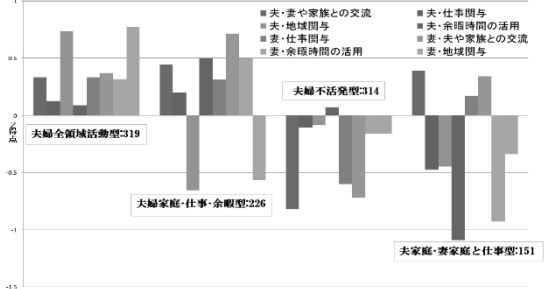


Figure 1 夫婦のワーク・ライフ・バランスのクラスタ分析

発型」が「夫婦全領域活動型」「夫婦家庭・仕事・
余暇型」「夫家庭・妻家庭と仕事型」よりも夫婦共
に「相互理解」が低いことが示された。子どもの

Table1 夫婦のワーク・ライフ・バランスと家族

	夫婦関係	ストレス	家族機能
	妻:相互理解 妻:相手への要望 夫:相互理解 夫:相手への要望	妻:とらわれ感 妻:不安感 夫:とらわれ感 夫:不安感	結合性 表現性 権威的 民主的
ライフステージ	夫婦全領域活動型 夫婦家庭・仕事・余暇型 Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ> Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ>	子:とらわれ感 子:不安感	
妊婦	Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ> Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ> Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ> Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ>	Ⅱ<Ⅲ>	Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ> Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ> Ⅰ<Ⅲ>
幼児	Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ> Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ> Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ> Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ>	Ⅱ<Ⅲ> Ⅱ<Ⅲ>	Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ> Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ>
児童	Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ> Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ> Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ> Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ>	Ⅱ<Ⅲ> Ⅱ<Ⅲ>	Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ> Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ> Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ> Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ>
中学	Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ> Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ> Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ> Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ>	Ⅰ<Ⅲ> Ⅱ<Ⅲ>	Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ> Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ> Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ> Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ>
高校	Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ> Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ> Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ> Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ>	Ⅱ<Ⅲ> Ⅱ<Ⅲ>	Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ> Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ> Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ> Ⅱ<Ⅰ-Ⅱ>

ストレスについては妊婦、幼児の家庭で「とらわ
れ感」が「夫婦家庭・仕事・余暇型」より「夫家
庭・妻家庭と仕事型」が高く、幼児の家庭では「不
安感」について「夫婦不活発型」が「夫婦家庭・
仕事・余暇型」よりも高かった。また、家族機能
については「夫婦不活発型」において各ライフス
テージを通して「結合性」「表現性」「民主的」の
各値が低い家族機能が生じることが示された。